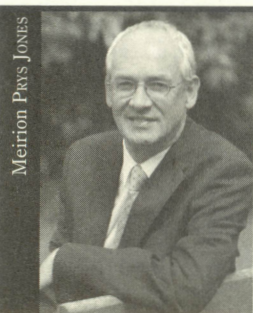


CULTURAL FACTORS IN REGIONAL REVITALIZATION IN WALES

ウェールズにおける地域振興における文化の役割について

Meirion PRYS JONES

メイリオン・プリス・ジョーンズ



〔プロフィール〕——南ウェールズ、ブリジェンドに生まれる。ウェールズ大学（バンゴール）でウェールズ語・ウェールズ文学を専攻したのち、ウェールズ大学（アバリストウィス）大学院で「教職専修コース」を修了する。その後、中・高等学校のウェールズ語主任を経て、ウェストグラモルガン州行政政府でウェールズ語教育委員、および指導部門の主任を務める。1993年より視学官、また1994年からは「ウェールズ語委員会」Bwrdd Yr Iaith Gymraegの役職を歴任し、2004年に代表委員長に就任、現在に至る。ウェールズ語委員会は、1993年のウェールズ言語語法に基づいて、ウェールズ語の使用を促進することを目的に創設された政府組織で、委員数は75名、年間予算は1,300万ポンド。現在はウェールズ議会政府のもとで運営されている。他にも「ブリテン・アイルランド協議会」言語部門長、「言語多様性推進機構」長を務めている。

1. ウェールズと文化

*Mae hen wlad fy nhadau yn annwyl i mi,
Gwlad beirdd a chantorion, enwogion o fri;*

わが父祖の国は わが宝
詩人とうたびとと 誉れ高き人々の国

これは、ウェールズ国歌の歌いだしです。

文化こそ、ウェールズをウェールズたらしめるものの中核です。私たちは何者なのか、何を尊び願うのか、それを表すのが文化です。文化はケーキにのったチェリーのような「飾り」ではなく、私たち民族の抱負とかかわっています。文化とは私たちの日々の生活を自然に彩っているものです。おしゃべり、読書、娯楽、信仰、集いなどです。文化は、また、私たちの生活を高めるものでもあります。文学、音楽、歌、芸術、演劇、建築です。文化は私たちをぐるりと取り囲み、私たちの日々を織りなし、過去と未来が会おう場所となります。

ウェールズにおいて、文化という、私たちのアイデンティティの本質は、ウェールズ語を通じて立ち現れます。

ウェールズ語はケルト語の一つで、昔は100万人を超える人々が話していました。現在ではウェールズ語人口は60万くらいです。ウェールズ語が不自由なく使えるとする人々のうちの82%は、日常的にウェールズ語を使っています。ですから、少数言語としては、非常に良好な状況にあるといえます。

ウェールズ語を話す人々には、文化や教育に積極的だという傾向があります。伝統的に、ウェールズ語話者は高い読み書き能力を誇ってきました。実際、ここ数百年間のウェールズ社会を振り返ると、社会階層の差を生むのは経済力ではなく、文化と教育でした。

2. ウェールズ語文学

こうした知識層がいなければ、ウェールズ語は今日まで生き残っていなかったかもしれません。

現存する最古のウェールズ語の詩が作られたのは1400年ほど前です。実際にスコットランドで起こった戦いを歌ったものです。当時イングランドは、侵入してきたアングロ・サクソン人に奪われてしまっていました。

口承伝承はウェールズ語社会の特徴で、この後600年ほど続きました。やがて書きことばの伝統も発展し、以来、ウェールズ文化の活力の源となっていま

す。

書籍ということで言えば、もっとも重要なものが1588年の聖書のウェールズ語訳です。ウェールズ語訳聖書はウェールズ語を信仰の言葉として定着させました。そのおかげで、ウェールズ語は共同体の中で生き続けることができたのです。

キリスト教は民衆のウェールズ語の読み書き能力を高め、ウェールズ語を消滅の危機から救いました。しかし、その一方で、失われた伝統もたくさんありました。ウェールズでは上流階級の伝統は保たれました。領主や貴族を讃えたり、その死を悼んだりする詩歌の伝統です。けれども、庶民のための詩や歌という文化遺産は失われてしまいました。

キリスト教、特にプロテスタントの一派であるメソディズムが、ウェールズ民衆のダンスや演劇や、あまり上品ではない慣習を禁じたのです。影響はウェールズ語の地名にも及びました。昔ながらの地名が聖書風のヘブライ語に変更されたのです。「ナザレス」という村の住民の方が、「タラサルン」というウェールズ語名の村の村人より信仰が厚いとでも言わんばかりです。

話を文学に戻しましょう。

ウェールズ国立図書館は膨大な数の蔵書を誇り、一方、毎年、ウェールズ内外からウェールズ文学を学ぶ学生たちが大学に集まります。

しかしながら、書き言葉の伝統は過去のことではありません。

ウェールズ書籍出版協会はウェールズ議会政府が資金を出している国立機関です。

ウェールズでは、年間約600冊のウェールズ語の新刊書籍が出版されています。ウェールズ書籍出版協会は、これらウェールズ語書籍の宣伝と、ウェールズにおける出版活動を推進し、著者・出版社・書店・図書館の仲介をしています。また作家に対する資金援助などを行うことで良質な書籍の出版・流通を支えています。

ウェールズ語のできない記者から、ウェールズ語でものを書いている作家は、なぜ、わざわざウェールズ語で発表するのかときかれることがよくあります。英語の出版市場の方がもうかることはもちろんで、ウェールズ語で生計を立てるのは大変なことでしょう。中には成功している人もいますけれども。

それにしても、なぜこんな質問をするのでしょうか？ 芸術はお金ではありません

せん。ウェールズ語が母語だからという理由の人もいれば、英語はできるが、ウェールズ語でしか自分を十全に表現できないという人もいるでしょう。最初に浮かんだ言葉が心に一番響きます。ウェールズ語で書くということは、だから政治的意味合いより、自然にそうなったというケースが多いのです。

3. ウェールズ語音楽

ウェールズ語音楽についても同じです。ウェールズといえば「歌の国」。もちろんウェールズ人にも音痴の人はいます。しかしウェールズが音楽的遺産を誇るのは事実で、ハープ奏者や男声合唱、ソロの歌手などを輩出しています。

「ケルズ・ダント」と呼ばれるハープ音楽はウェールズで長い歴史を持っています。ハープの伴奏に合わせて詩を朗唱する特殊なスタイルのもので、起源は古代ケルトの神官ドルイドの時代というから、1,000年以上昔に遡るでしょうか。ケルト社会以外にもハープは存在しましたが、ウェールズでは詩の要素が中心となることで、独自の発展をとげました。ケルズ・ダントは詩の朗詠で、言葉が最優先されるのです。

20世紀に入ってケルズ・ダントは大きく変化しました。かつては1人で歌うのが決まりでしたが、ソロからデュエット、そしてグループでも歌われるようになり、1970年以降、ケルズ・ダントの合唱団も誕生しています。

ケルズ・ダント・フェスティバルは毎年恒例のイベントで、規模も年々大きくなっています。50年前なら村の公民館で開催できたものが、今や大ホールが会場です。テレビやラジオで放送されるようになった結果です。20年ほど前からテレビの生中継が始まり、高い視聴率を誇っています。

ウェールズといえば美しい自然で知られてきました。けれども1730～1850年にかけて起こった産業革命が景観を一変してしまいます。緑の山々やひっそりとした谷間の下に、石炭・スレート・鉄といった、世界を近代化に導く鉱脈が発見されたのです。

ウェールズの鉄は、世界中で大型蒸気船や鉄道を作るのに使われました。ウェールズの石炭が蒸気機関の燃料になりました。1870年には石炭採掘量は

1,300万トンを超え、その半分が鉄道に積まれて輸出に回されました。カーディフ、スウォンジー、ニューポートといった南ウェールズの大きな港から世界へと運ばれたのです。

けれども、鉱山で働く人々や家族の生活は悲惨でした。何千という鉱夫が鉱山の事故で亡くなりました。父親のなきがらの傍らに息子が倒れているといった光景も珍しくはありませんでした。たった6歳の子どもが12時間交代で穴を掘っていた事実も記録されています。地上では、人口過密と不衛生な環境によって、しばしばコレラがはやりました。

しかし、鉱山の暗がりから生まれたものもあります。友情や誇り、そして共同体の絆です。集会やクラブなどが、これら新興の産業地帯に誕生します。特に有名なのは男声合唱でしょう。労働者たちは、地下の闇を抜け出て、力強い声を合わせ、賛美歌を見事に合唱するのです。

鉱山も製鉄所も今や姿を消しました。「わが谷は再び緑なりき」、です。しかし産業革命期の遺産は音楽に、私たちの魂にしっかりと残っています。

ここで二つの合唱団をご紹介します。南ウェールズの「オンリー・メン・アラウド」と北ウェールズの「アスゴル・グラエナエソウィ」です。どちらも、全国合唱コンクールで優勝、ウェールズ語で歌う姿がUK全土にテレビで流されました。500年前の歌から現代曲までを披露し、コーラスに壁はないこと、合唱は瑞々しくかつファンキーであることを証明したのです。

民衆の歌ばかりではありません。1960年代にはポップ・ミュージックが花開き、時代の精神を映す鏡として発展しました。どれくらいの数のウェールズ語バンドが、今まで、そして今日、活動しているのか見当もつきません。たぶん何千という単位でしょう。

海外に行くと、ウェールズ語のポップ・ミュージックはどんな感じなのかとよくきかれます。しかし答えを見つけるのは大変に困難です。イングランドやアメリカや日本の人が自分たちの国の現在の音楽について一言で言い表せないのと同じです。歌詞がウェールズ語だというだけで、それ以外に共通点はありません。音楽ジャンルも歌の内容もさまざまで、一つのカテゴリーにあてはめるのは困難です。

歌詞がウェールズ語だから限られた人にしかアピールしないかということ、そんな事はありません。人間は、言葉とは関係なく歌に聞き惚れるものです。

ヨーロッパで酒場に行つて御覧なさい。お粗末なユーロ・ポップと魂のこもった歌を聞き分けられるでしょう。歌詞がわからなくてもです。マーケティングやプロモーションをもつと行えば、ウェールズ語の歌は、ウェールズ語関連のイベント以外の場所でも耳にする機会が増えるはずです。

4. ウェールズ語演劇

ウェールズ語演劇が確立するのは18世紀。マーケットなどで余興として上演されました。19世紀には大きな町に劇場が建てられるようになり、常設の芝居小屋のほか、旅回りの劇団がフェアや劇場を回っていました。

ウェールズ語の国立劇団ができたのは2003年です。ウェールズ各地をツアーするだけでなく、時には国境を越えてロンドンで上演することもあります。ナショナル・アイステツズヴォッドでも演目を出し、学校や地域とも関係を保つよう努めています。ほかにも、ウェールズ各地に民間の劇団がたくさんあって、ドラマやコメディほか、各種出し物をウェールズ語で演じて、地域社会の基盤となっています。

今、聞き慣れない言葉を使いました。「アイステツズヴォッド」。一体何なのか説明させてください。

最初のアイステツズヴォッドが開催されたのは1176年。詩人や音楽家がウェールズ中から集まる大イベントでした。領主と食卓の席をともにする榮譽が最高の詩人・音楽家に与えられました。この慣例は、現在のナショナル・アイステツズヴォッドにも詩のコンクールの優勝者に椅子を与えるという形で受け継がれています。

アイステツズヴォッドは世界のビッグフェスティバルに数えられ、毎年16万もの観客を集めています。文学、音楽、美術などが交じり合い、世代を問わず楽しめる催しであることに加え、ウェールズ各地を移動するイベントであることもアイステツズヴォッドの魅力です。住んでいる地域に関係なくウェールズ人の財産となっています。ウェールズの北部と南部で毎年、交互に開催され、地元を大いに盛り上げます。

アイステッツヴォッドは地域社会でウェールズ語を使う絶好の場です。観光も期待でき経済効果は絶大で、開催期間中600万～800万ポンドの利益を地元にもたらしめます。

アイステッツヴォッドは芸術から科学技術に至るまで、ウェールズのあらゆる文化を育む場所です。開催期間は1週間ですが、準備等に2年以上を費やします。開催地では、通常、イベント終了後もウェールズ語文化の推進事業が継続されます。

もう一つ重要なアイステッツヴォッドがあります。「アイステッツヴォッド・アル・イルズ」という青少年のアイステッツヴォッドです。7歳から24歳の参加者が1週間にわたり、ウェールズ語の歌、朗読、ダンス、演劇、音楽を競います。ヨーロッパを代表する若者のアート・フェスティバルです。

インターナショナル・アイステッツヴォッドは北ウェールズのスランゴスレンで毎年7月に開催されます。合唱、フォークダンスのフェスティバルとして、世界中から参加者が集まります。1947年の創設以来、毎年平和を願うメッセージとともに開会します。2004年にはノーベル平和賞候補になりました。調べたところ、日本とも縁が深いようです。甲南女子短期大学が合唱部門で優勝したのが1985年。1992年には西宮市の女声合唱団「遊」が1位に輝いています。

5. 地域社会における推進運動

ここまでウェールズ語文化の歴史的背景、そして古代文化が今日、全ウェールズの規模で発展している状況を概観しました。けれども文化や言語が生きていくためには、地域社会の層に深く根ざし、生活に自然に溶け込んでいることが必要です。

産業革命期の南ウェールズについてお話したので、次は中部と西部について触れましょう。農業と牧畜を主とする地域です。ウェールズ農村部はウェールズ語がもっとも話されているところです。ウェールズ北西部では人口の80%が日常的にウェールズ語を使って社会生活やビジネスを営んでいます。

「青年農業者クラブ」はウェールズ農村部最大の青年組織です。ウェールズ

にいる6,000人の若い農業者、そして農家以外のさまざまな職業の若者たちの代表です。年間、旅行や競技会など行事がふんだんにあります。海外に行ったイベントに参加したりすることで、新しい人々と知り合い、ウェールズの各地域から来た若者と出会い交流する機会もあります。

青年農業者クラブのような社交組織は、農村部においてウェールズ語文化を支える大きな励みとなります。娯楽や社交を楽しむことで若者が地域にとどまり、地域の経済やイベントを盛り上げてくれるからです。

ウェールズ農村部は確かに、昔からウェールズ語の中心地域かもしれません。けれどもウェールズ語を媒体とした教育がこの30年間に普及したことが、かつての工業地帯であるウェールズ南東部や都市部にウェールズ語が広がる基盤となりました。

日本の都市と比べたら小さくはありますが、カーディフはウェールズの首都でウェールズ最大の人口を誇ります。ウェールズの商業・ビジネスの中心であり、ウェールズ全体にかかわるナショナルな規模の文化・スポーツ関連施設、たとえば、オペラハウスやフットボール・スタジアム、そしてBBCウェールズ局などのメディアを擁しています。ウェールズ議会もここに 있습니다。人口は1,100万人で、ウェールズ総人口の3分の1を上回ります。カーディフはウェールズ一の観光拠点で2009年には1億4,600万人の観光客が訪れています。

産業革命の時代に、海外を含め、各地から押し寄せた移民労働者の大波は、もともとウェールズ語を話していた人々の数を圧倒してしまいました。しかしカーディフでは1950年代にウェールズ語で授業を教える学校が初めて創立され、少しずつですがウェールズ語が往年の力を取り戻してきました。

このウェールズ語を媒体とする教育やウェールズの他の地域からの移住者によって、カーディフのウェールズ語人口は1991年から2001年までの10年間で1万4,451人に増加しました。現在ではカーディフ住民の11%がウェールズ語を話しています。

ウェールズ語文化を地域レベルで支援する組織として「メンテール・ヤイス」があります。ウェールズ各地に22存在し、その地域におけるウェールズ語使用の促進のための支援を行う地域組織です。通常は、カウンティと呼ばれる州を単位とした地域サービスを行っていますが、その際、地域住民の要望に沿った活動を行っています。対象は個人から組織・企業に及びます。

アドバイスや支援の多くは無料です。以下、メンテールが行っているサービスをいくつかご紹介します。

- ・ 家庭で子どもをバイリンガルに育てるためのアドバイス
- ・ 組織の中でウェールズ語使用の促進を図るためのアドバイス
- ・ 企業がバイリンガルの顧客サービスを行うためのアドバイス
- ・ ウェールズ語を媒体とする教育についてのアドバイス
- ・ 子どもや若者向けのウェールズ語を使う活動
- ・ ウェールズ語学習者が、教室の外でウェールズ語を実践する活動
- ・ ウェールズ語の翻訳作業や翻訳者の紹介
- ・ 地域団体との連携による活動

6. メディア

世界中どこでもメディアは大きな社会的影響力を持っています。これは、広く人々にメッセージをアピールできるというメディアの機能のおかげです。

新しいメディア技術をウェールズ語社会が次々に取り入れていった様子から、ウェールズ人は、ニュー・メディアの利点を活用することに熱心であったことがうかがわれます。そうすることで、ウェールズ語が民衆文化のみに限定され、その結果、文化の中心からはずれてしまうことがないように努めてきたのです。

その証拠に、ウェールズにおけるニュー・メディアの歴史を見てみましょう。まず出版です。ヨーロッパにおける活版印刷術の実用化から100年たった1546年、ウェールズ語による最初の書籍が出版されました。題名の『アナ・スリヴル・フン』とは、「この本の中に」という意味です。続いて新聞です。初の英語新聞『オックスフォード・ガゼット』創刊から約80年後の1735年、ウェールズ語の新聞を刊行しようという試みがありました。題名は『トラサイ・アル・ヘン・オエソイズ』、すなわち「古代の宝」が予定されていました。実際に本格的なウェールズ語の新聞が誕生したのは1814年、『セレン・ゴメル』という週刊新聞です。ウェールズにおける初の英語の週刊新聞の発行か

ら遅れること、わずか4年でした。

その後ウェールズ語の新聞はどんどん普及し、国立図書館の記録によると、1880年代にはウェールズ語の週刊新聞が25紙存在しました。

電線を使ってメッセージを伝達することができるようになると、メディアの次なる発展として無線技術が1800年代の終わりに導入されました。ブリテンではBBCが1922年に創設されます。ウェールズから最初のラジオ番組が放送され、ウェールズ語の歌が流れたのが翌年の1923年2月13日のこと。ラジオ技術が発明されて30年が経っていました。ウェールズ語の番組は徐々に増え、35年前（1977年）にラジオ・カムリが誕生し、ウェールズ語放送は1日20時間に拡大されました。

ウェールズ語のテレビチャンネル、S4Cが放送を開始したのは1982年。それ以前は、BBCやITVのウェールズ地方局で時折、ウェールズ語のテレビ番組が流れるくらいでした。それもシーズンオフやゴールデンタイム以外の時間帯です。ウェールズ語の視聴者は、この程度のサービスに満足できませんでしたし、英語の視聴者にとっても、全国放送の番組の時間が改変されたり、放送自体がなくなったりするので不評でした。

1970年代にはウェールズ語推進運動が盛んになって、ウェールズ語のテレビ放送を求める運動が広まります。ウェールズ語はすでに自前のラジオ局を獲得していました。BBCラジオ・カムリです。そうして、政府は、ようやくウェールズ語の独立テレビ局を認可したのです。

S4Cは、さまざまな種類のウェールズ語の番組を放送します。チャンネル4と同様に、自前で番組は作っていません。その代わりに、BBCカムリやフリーのプロデューサーに番組制作を委託しています。特に子ども番組は成功しています。Super Ted, Fireman Sam, Sali MaliといったテレビアニメはS4Cが放映権を持っていて、世界中のテレビ局で放送されています。S4Cのテレビ映画も海外で評価されています。「ヘッズ・ウィン」はウェールズの詩人で、第一次大戦で戦死したエリス・ハンフリー・エヴァンズの生涯を扱った反戦ドラマで、1993年のアカデミー賞・最優秀外国語映画賞にノミネートされました。「ソロモンとガエノール」はユダヤ人の若者とウェールズ女性の悲恋を描いた作品で、1999年に同じくオスカーにノミネートされています。

この30年間、S4Cは最新の放送技術を活用して発展してきました。昨年は

デジタル化に完全移行し、2012年末までには、すべての番組をハイビジョン放送にする予定です。

ニューメディアにおけるウェールズ語のサービスは、S4Cのデジタルテレビ放送などさまざまな分野で展開されています。このほかにも、ケーブルテレビでのデータ放送や、携帯電話のニュースサイト、ケーブルテレビによるラジオ・カムの番組のヨーロッパへの配信、RSSを用いて、ウェールズ語ニュースの更新情報を他のウェブサイトへ配信するサービスなどが行われています。ウェールズ語のブログも増えています。

また、心強いことに、世界最大のSNSであるFacebookをウェールズ語に翻訳するというボランティア活動も2年前から始まりました。

以上のように、ウェールズ語と文化は密接に絡み合っています。古い起源を持つ文化が、紆余曲折の末、生き残り、発展しながら現代にまで続いているのです。

ここで、ある人物をご紹介します。彼こそ、私がお話ししてきた、ウェールズの生き方を体現する人物です。その人物とはケリ・ウィン・ジョーンズです。彼はウェールズ語で詩を書いています。アイステツズヴォッドで優勝に輝いた彼の詩は、農業で暮らしを立てる農民の苦労をうたったものでした。教師として勤めた後、今はウェールズ語の出版社で編集者をしています。合唱団のメンバーでもあり、ウェールズ語の番組の常連です。Facebookの会員かどうかは知りませんが、もしそうなら、きっとウェールズ語で会員情報を書いていることでしょう。

7. グローバル化と少数言語

21世紀の私たちは、いまだかつてなかった最大のチャレンジに直面しています。グローバル化の時代、少数言語文化の未来は、皆が手をたずさえ、頑張って守っていかなければいけません。

世界的な不景気はウェールズにも大きな打撃を与えています。公共的経費の大幅な予算削減が図られています。今年、ウェールズ議会政府はウェールズ語

振興政策のための予算確保に踏み切りました。しかし、ウェールズ語テレビチャンネルであるS4Cを支えるお金は厳しい状況にあります。政府がBBCとの統合を検討しているということです。現在、ウェールズ語放送を守るためのキャンペーンが進行中で、私たちウェールズ語委員会が積極的に活動しています。

芸術や文化は、恵まれた時代だけのためにあるものではありません。むしろ困難な時節でこそ、私たちを支える大切な役割を発揮します。経済的豊かさだけでなく、心の豊かさを作り出してくれるのです。雇用の方が生まれることで、私たちの創造意欲を刺激し、ひとりひとりを勇気づけ、困難に立ち向かわせるのです。

文化は進歩を促す力となるべきです。自立し、多様性を保った、未来志向の国家の礎とならなければなりません。だからこそ、私たちには文化をいつくしみ、育て、讃えていく必要があります。

今日は、ウェールズ国歌の冒頭の歌詞から私の話を始めました。そこで、この歌の最後の歌詞で、話を結びたいと思います。

*Tra môr yn fur i'r bur hoff bau,
O bydded i'r hen iaith barhau.*

海が壁となって、この地を守る限り、
我らの古き言葉よ 永遠なれ

(訳：森野聡子)